

YUJ 2010年 夏

平成22年7月15日発行（第6号）

ユジュ

「YUJ」とは「瑜伽」とも書き、サンスクリット語で、「結ぶ、繋ぐ」を意味します。

YUJを手にとった方とお寺が良い縁で結ばれますように。

<http://www.kagawa-konzouji.or.jp/gyoji/yuj.html>
yuj@kagawa-konzouji.or.jp

先祖 供養

人は死後、生まれ変わるのか
消滅してしまうのか

日本古来の祖霊信仰

人は亡くなるとどうなるのでしょうか。魂は存在するので

しょうか。魂があるとするならば、消滅してしまうものなのか、永

遠に不滅のものなのか、永遠に不滅のものなのでしょうか。

残念ながら葬送を執り行う僧侶といえど、この問題に対して、正しく答えられる者はおりませ

ん。それはお釈迦さまが、このような形而上学的問題に対して、答えることを拒否されたからです（これを無記といいますが）。

この問題は、私達が「生きていく」限り、想像するしかないでしょう。そこで、過去に答えを求めてみましょう。

仏教が伝わる以前の日本の宗教を古神道といえます。古神道では、人の死について、次のように考えていました。

人は死ぬと、肉体から魂が遊離し、精霊となって山を昇っていきます。精霊には二つの性格があり、一つは人に取り憑いて災いをもたらす荒魂、もう一つは雨や日光の恵みなどをもたら

す和魂です。荒魂を供養することで和魂になり、清められた精霊を祖霊といえます。一定の歳月を経ることで、祖霊は先祖神へと昇華され、山中に鎮まるものと考えられていました。

祖霊や先祖神は、盆や正月といった決まった季節に里に下りてきて、村人に福や恵みをもたらします。このため村人は、先祖の精霊が祖霊や先祖神となるように、供養や祭祀を行うようになりました。これが先祖供養の始まりです。これらの神々は、後に氏神として祀られるようになります。

このように当時の日本人にとって、「死」とは生滅ではなく、



十三仏御影

神になるための再生でした。そして神となった祖霊は、里に下りてきて、村人に福や恵みをもたらすと、生と死が循環する世界観を持つていたのです。

このような祖霊信仰に対して、仏教はどのように関わってきたのでしょうか。

インドの輪廻思想

輪廻思想とは、人が死後、再び生まれ変わること、仏教を代表する思想であるかのように語られますが、その源流は、仏教以前のインドのバラモン教にあります。

人は死ぬと、魂だけが脱け出し、そのまま上空へと昇り始めます。幾日かして、雲の高さまで上昇した魂は、雨と共に地上へと降り注ぎ、地中へ染み込みます。その後、魂は植物によつて地中から吸収され、その植物を食べた動物の種（精子）となり、再び生を受けると考えられました。

ここでは輪廻する主体を魂と

呼びましたが、これをバラモン教では我（アートマン）と呼びました。輪廻は生前の行い（業・カルマ）によつて決まるとして、善行は善業を、悪行は悪業を生むとする因果応報の思想によつて、死生観を完成させました。そして輪廻する世界は苦の世界であるとして、輪廻からの解脱を目標としたのでした。

この輪廻思想をさらに発展させたのが仏教です。まず輪廻を生有、本有、死有、中有の四つの期間（四有）に分類しました。生有とは生を受ける瞬間、本有とは生を受けてから死ぬまでの期間、死有とは死ぬ瞬間、中有とは、死んでから次の生を受けるまでの期間です。仏教ではこの中有の期間を七日、長くても四十九日と決めました。

当時より太陽暦を用いてたインドでは、暦の上で、七日、つまり一週間を一つの区切りとしていました。このように七を基準と考えると、七進法になります。七を七回重ねると、十進法

の百と同じように、桁が一つ変わります。これを満数と言います。

死後七日が七回来るまでの期間を、死者が次の生を受けるまでの

準備期間であると考え、これを中陰や中有と呼びました。そして満数である四十九日を満中陰と呼ぶようになったのです。

中国の十仏信仰

仏教は中国を経て日本へと伝わってきました。インド人の四有といった哲学的考察に対し、中国人は具体的な説明を求めました。そこで冥界の主、閻魔王が登場することになります。人は死ぬと霊となつて、冥土への旅に出ます。三途の川を渡り、閻魔王へと向かいます。こ



万灯まつり（先祖供養）

こで生前の善行と悪行について取り調べを受け、悪行が多いものは地獄へと落とされます。この取り調べは、初七日から七七日まで、七日毎に七回行われます。取り調べの長であり、かつ裁判官であるのが閻魔王であり、十王と呼ばれる十名の閻魔王がそれぞれの取り調べを司ります。

また裁判ですから、弁護士も必要です。死者の弁護を担当するのが、諸仏、諸菩薩であり、初七日には不動明王、二七日には釈迦如来、三七日には文殊

菩薩、四七日には普賢菩薩、五七日には地藏菩薩、六七日には弥勒菩薩、そして七七日には薬師如来となります。この薬師

如来の力は絶大で、無事に供養が営まれると、死者の霊は極楽浄土へと向かわせることが決定されます。こうして死者の霊は無事に阿弥陀仏の極楽浄土へと行くことが約束されるのです。

四十九日の間は忌中といい、遺族が旅行や祝いの席などを慎むべきであるとするのも、裁判中に心証を損なわないための配慮なのです。

ここまでで七仏が登場しましたが、残りの三仏は百箇日(観世音菩薩)、一回忌(勢至菩薩)、三回忌(阿弥陀仏)と見守ることになります。

もともと中国では、親の死を迎えた子は、二十七ヶ月の間、仕事など一切の社会生活から離れて喪に服しました。このよう

なことができるのは上流階級の人々だけだったでしょう。これは儒教の「孝」の精神に基づく

もので、親に対し「孝」が尽くせることは、子孫繁栄の象徴でした。つまり、中国人にとって先祖供養とは、「孝」の実践でした。

十三仏への発展

それが仏教の中陰の思想と結びつき、服喪の期間を先祖の霊が阿弥陀仏の極楽浄土へと辿り着く期間と一致させて、十仏信仰へと展開されたのでした。

さて、再び日本に場面を戻しましょう。インドの輪廻思想、さらに中国で発展した十仏信仰は、人の死が神としての再生すると考える日本人にとって、受け入れやすいものであったでしょう。

次第に浄化され、安定していき次第に浄化され、安定していき

ます。先程はこの期間を「一定の歳月」と述べましたが、一般的には三十三年、ないし五十年と考えられていました。この期間を経て、「弔い上げ」と言われる最後の祭祀を執り行い、祖霊が神へと昇華されると考えられていました。

ここで重要なのは、「弔い上げ」の期間が一般的に三十三年であった、ということ。仏教の十三仏事でも「弔い上げ」は三十三年忌とされており、日本で十三仏事が受け入れられたのは、民間に根強く残っていた祖霊信仰と合致したからでしょう。

三十三回忌の本尊は、虚空蔵菩薩です。虚空とは、無限の広がりを持つ宇宙そのものであり、その無限の智慧と功德をその中に蔵しているもの、それが虚空蔵菩薩です。この虚空蔵菩薩を供養するということは、どういふことでしょうか。

宇宙そのものとなりましたが、虚空蔵菩薩は宇宙をその中に納めています。これは、供養している自分自身の中に、先祖神そのものが納まっていることを意味します。

つまり、先祖を供養するといふことは、自分自身を供養することに他ならないのではないのでしょうか。自分の中に脈々と受け継がれた先祖の想いを感じ、自分がいかに大切に尊い存在であるかを知ること、同じく他の全ての人も、その一切が大切に尊い存在であることを知る、それが先祖供養の意義ではないか、と思うのです。



『お位牌はどこから来たのか』
多田孝正 興山舎



『仏教民俗学』
山折哲雄 講談社学術文庫



今回も、煎茶道のお話から。月に一回のお稽古に滋賀県まで通うことになり、その初めてのお稽古の日。月に一回のお稽古なので、当然のことながら私一人に対するマンツーマン指導で、約四時間の長丁場となります。普通のお稽古は、数人に対し、一時間程度の指導でしょうから、先生の気合いも当然違ってくると思います。まずは、先生に基本のお手前をしていただいた後、早速実践です。

初めは、今までに見たこともない茶道具の名前を教えてもらい、実際にお手前を始めます。普段私たちが飲んでいる煎茶と違い、とても小さな茶道具で作法を進めていきます。一つ一つの動きにももちろん意味があるのですが、初めてお手前をする者にとっては、何をやっているのか記憶にも残らないほど細かく、難しい。けれども、今まで何の作法も身につけてない私にとつて、全ての所作が新鮮に感じられます。ぎこちないながらも一通りの作法を終えると、長い時間が過ぎているにも関わらず、不思議と疲れも出ず、むしろ背筋がすっと通るのを感じたのです。これはすごい、初めてのお稽古にも関わらず、これから学んでいくことに大きく期待がふくらみました。今回の煎茶道のお話はこれくらいにして、この夏お勧めのレシピのご紹介を。うだるような暑い夏に、するするっと食べられるジュレはいかがでしょうか。他に、旬のフルーツを入れてみるのもお勧めですよ。ただし、体が冷えるので、食べ過ぎにはご注意ください。



グレープフルーツとバナナのジュレ

【作り方】1. 鍋にグラニュー糖、はちみつ、水、寒天を入れて火にかけて、沸騰したら弱火にして約5分煮る。2. ふたをして約10分蒸らし、レモンの搾り汁を加える。3. ピンクグレープフルーツはくし形に切って、薄皮をむき、バナナは斜め薄切りにする。4. 器に3を盛り付け、2の粗熱が取れたら流し入れて冷蔵庫で約1時間冷やし固める。

【材料／4～5人分】
グラニュー糖…40g、はちみつ…50g、水…400ml、寒天…2g、レモンの搾り汁…1/2個、ピンクグレープフルーツ…1個、バナナ…2個

円珍・乃木まつり

金倉寺では、乃木將軍の命日（一九一二年九月十二日）に合わせ、毎年九月の第一土日に「円珍・乃木まつり」が開催されます。本年は九月四日（土）・

五日（日）の両日で、金倉寺の行事として、四日に万灯会（先祖供養法要）、五日に採燈大護摩修行が行われます。

四日、午後六時から行われる万灯会では、皆さまから奉納頂いた献灯によって、仏や神を供養する法要です。諸仏・諸神の数は数多く存在すると言われ、仏教ではとても数の多いことを「八万四千の」と言います。このことから、数多くの仏に供養するということで、「万灯会」と呼ばれるようになりました。

万灯会はお盆や彼岸の時期に行われることが多く、先祖神になられたご先祖さまを灯明によって供養し、一年間の無病息災を願います。

薄暗くなつた境内を数多くの灯明が彩り、風によって灯が揺らめく様子は、なんとも幻想的です。参道脇にも数多くの灯明が飾られ、その間を歩いて目指す本堂は、まさに極楽浄土を思わせるかのような美しさです。

五日、十三時頃から行われる採燈大護摩修行は、屋外で行われる大護摩です。そのルーツは密教の護摩修行にあると思われがちですが、実は日本に仏教がもたらされる以前、日本の祖霊信仰と深い繋がりがあります。

今回の特集「先祖供養」で「魂は山を昇っていく」といいますが、これを山岳信仰といえます。同様に海のはるか彼方に常世（神々の国）があると考える海洋宗教も存在しました。

この海洋宗教では、海岸沿い

の高い山々で火を焚き、常世の神々や龍神に供養をしました。例えば、四国霊場第十二番の焼山寺は、もともと常世の神々に供養していた火が、まるで山が焼けているみたいに見えることから、「焼山」と呼ばれるようになったようです。

仏や神に献灯する台を「灯籠」といいますが、これは龍神に灯を献上したためです。海洋宗教が廃れ、山岳信仰に吸収されたため、「龍神から献上された灯」と変わってしまった。

その後日本に仏教がもたらされ、山岳信仰と密教が融合して生まれたのが採燈護摩です。金倉寺の採燈大護摩修行は、毎年約四十名もの山伏により行われ、立ち昇る噴煙の中に「龍がいる！」とおっしゃる方もいます。

今回の特集「先祖供養」で「魂は山を昇っていく」といいますが、これを山岳信仰といえます。同様に海のはるか彼方に常世（神々の国）があると考える海洋宗教も存在しました。是非金倉寺の採燈大護摩修行を体感して下さい。

■編集後記

哲濟 今年久しぶりに梅雨らしい梅雨やつたねえ。

香祥 最近、ゲリラ豪雨とかで各地とも大変みたいやし。

哲濟 ゲリラ豪雨凄かった。その影響で、土石流も起きてたみたいやね。

石土入峰修行でも多くの落石があつたわ。山は癒されるけど、怖いところでもあるね。でも、怖い所だからこそ、神秘的でもあるよね。

哲濟 いや、死後、魂は山に鎮まるって考えたんやろうね。せやけど、下りて来はるには、少し早いなあ。

平成二十二年七月十五日発行
編集・発行 金倉寺
発行人 村上法照

お問い合わせは

〒七六五-0031

香川県善通寺市金蔵寺町一六〇
TEL〇八七七一〇八四五

yuji@kagawa-konzouji.or.jp



「気になる？」

「気になる！」



その六、土用の丑

今年もまた、暑い夏が近づいてきました。夏といえば鰻。土用の丑の日を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。

そもそも、この習俗は、江戸時代に広まったようで、その由来は諸説ありますが、こちら讃岐の出身である平賀源内が広めたという次の説が有力とされています。

商売がうまく行かない鰻屋が、夏に売れない鰻を売るため源内の所に相談に行ったところ、「丑の日に『う』の字がつく物を食べると夏負けしない」という民間伝承からヒントを得て、「本日丑の日」と書いて店先に貼ることを勧めました。すると、源

内の言うことならということでは、その鰻屋は大変繁盛しました。その後、他の鰻屋も真似るようになり、定着したということですね。

なお、その土用丑の鰻は、当時の知識人の間に広まっていた陰陽五行説の理にかなったものでもありました。最も暑い土用の時期には、体調を崩す人も多いものです。陰陽五行説では、暑さの元になる「火」の力を用いるには、「火」の苦手とする「水」を用いるとよいとされていました。その「水」の色は黒とされ、鰻は水中に住み、黒い体を持つ、つまり「水」の性質を強く持つ生き物ということから、鰻を食べると暑気を克服できるとされたのです。



『知っておきたい 日本のしきたり』
武光誠 角川ソフィア文庫

小僧さんの自習室



その5. 円珍さん⑤

仁寿三年（八五三）七月十五日、円珍さんは唐の商人、王超と欽良暉の船に乗り、翌十六日に博多を後にして、値嘉島の鳴浦（長崎県五島市奈留町）で風待ちのため停泊しました。

当時の航海は、季節風だけが頼りの大変なものでした。例えば、延暦二十三年（八〇四）、遣唐船として四隻が派遣されましたが、最澄さんが乗船した第一船は五十二日、空海さんの乗船した第二船は四十日、さらに残り二隻は海の藻屑となりました。まうという有様でした。

この頃に、円珍さんは次の歌を詠んでいます。

法の船 さしてゆく身ぞ

もろもろの 神も仏も
われをみそなへ

仏法を求め、船に身を任せてゆく私達を、諸神も諸仏も、どうぞお護り下さい。円珍さんの気持が素直に出ている歌だと思えます。

八月九日、強い東風に乗って、いよいよ出帆しました。四日目の夕に吹いた北風に流され、翌十四日の朝には陸地が見えてきました。その地は琉球の国（台湾）で、当時は食人の地と信じられていました。

そこで円珍さんは、一心に不動明王を念じたところ、三度金色の不動明王が現れ、北風がたちまち東風へと変わり、翌日昼頃には、福州の連江県（福建省連江県）に着岸したのでした。時に唐の大中七年八月十五日でした。



『人物叢書 円珍』
佐伯有清 吉川弘文館